

柏原市所在遺跡発掘調査概報

——大県遺跡、太平寺・安堂遺跡——

1984年度

1985年7月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市では、文化財保護の考え方の下に、市内遺跡分布図を作製し、遺跡内でおこなわれる土木工事等によって遺跡が破壊されることがないよう努力しています。この分布図から、旧大和川の川筋を除く市内全域のほとんどが閑知の遺跡となっていることが一目瞭然にわかります。このように遺跡が密集しているという背景に、原始・古代から現代に到るまで、恵まれた自然環境をうまく利用してきた人々の生活の知恵を窺い知ることができます。

今回、発掘調査をおこなった大県遺跡では、弥生時代から中世にかけての土地の利用法を推定することができました。太平寺・安堂遺跡では、5世紀代の掘立柱掘形や奈良時代の溝等の他、弥生時代から中世に到るまでの様々な文物を得ることができました。また当地には、奈良時代に天皇行幸の際の宿泊施設として使用された「智識寺南行宮」があったのではないかと考えられています。今回の調査では、行宮に関する明確な遺構は確認できませんでしたが、奈良時代の土器を多量に検出したことは大きな成果であります。

このような発掘調査により、今まで文献資料や表面観察でしか推定しえなかった遺跡のあり方が、徐々にではありますが明白となってきています。これらの成果を分析することにより初めて歴史の再構成が可能となってくるのです。しかし開発により、充分な発掘調査もしないで遺跡が破壊されてしまえば、その遺跡が内包していた歴史、ひいては日本史、世界史の一コマが消滅してしまうことになるのです。それ故、私達は、文化財の重要性を認識し文化財保護を前提とした開発が可能となるよう努力しなければなりません。今後とも皆さんの文化財保護に対する御理解・御協力をお願い致します。

昭和60年7月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が昭和59年度に原因者負担事業としてマンション建設に伴い実施した大県遺跡84—3次調査と、当市水道局が公共事業としておこなった上水道管理設に伴う太平寺・安堂遺跡85—1次調査の発掘調査概要報告書である。
2. 大県遺跡84—3次調査は柏原市教育委員会社会教育課 北野重が担当し、1984年9月3日から9月8日までおこなった。太平寺・安堂遺跡85—1次調査は同市同課 田中久雄が担当し、1985年3月13日から3月23日までおこなった。また、本書の執筆は、それぞれの担当者がおこなった。
3. 発掘調査に関する諸費用は、大県遺跡84—3次調査は有限会社松柏（代表取締役 松本興系氏）、太平寺・安堂遺跡85—1次調査は柏原市水道局の負担によるものである。
4. 本書で使用した方位は、磁北である。
5. 発掘調査及び遺物整理に携わった人々は、以下の通りである。

石田 博	竹下 賢	桑野一幸	安村俊史	石田成年
谷口京子	仲井光代	松村富子	竹下彰子	秋田大介
伊藤芳匡	今中太郎	清瀧健二	森田好則	麻栄三郎
朝田行雄	井上岩次郎	奥野 清	川端長三郎	谷口鉄治
西岡武重	分才春信	道篠甚蔵	森口喜信	山田貞一
山本芳一	飯村邦子	乃一敏恵	松成早苗	村口ゆき子
横関勢津子	吉居豊子	竹下真紀	(順不同・敬称略)	

6. 発掘調査にあたっては、有限会社松柏、柏原市水道局、馬場建設、および地元住民の方々に多大な御協力を賜わった。記して感謝の意を表します。
7. 発掘調査で得られた成果は、写真、実測図、カラースライドとして活用できるようにした。また、出土遺物は柏原市教育委員会で保管するとともに、同市歴史資料館で展示している。

目　　次

はじめに

例　　言

第Ⅰ章 大県遺跡84—3次調査..... 1

第Ⅱ章 太平寺・安堂遺跡85—1次調査..... 6

図　　版

第1章 大 県 遺 跡

1. 発掘調査の概要

大県遺跡は、柏原市平野、大県にかけて所在する遺跡である。柏原市の北部域にあり、その東半部を占める生駒山地の西麓部に位置している。この生駒西麓部には、山ノ井遺跡、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡等多くの遺跡が存在し、この中で大県遺跡は、その中心となる遺跡である。この遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世と多くの時代の遺物と遺構がみられる複合遺跡であり、そのどの時代をとっても中心的存在を示す遺物や遺構が検出されている。

当調査区は、大県遺跡の北西部に位置しており、各時代の拵がりを確認すると共に周辺の環境復元に重要な成果を与える地域である。当調査は、昭和59年7月27日、柏原市平野1丁目3-1所在地に株式会社松柏代表松本興系氏から土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届出書が提出され、柏原市教育委員会が調査依頼のもとに発掘調査を実施したものである。



図-1 調査区位置図

2. 遺構

調査は、昭和59年9月3日から9月8日まで6日間実施した。遺跡が深い為、原因者提供の重機によって掘削を実施し調査を進めた。

調査区は、敷地のほぼ中央の建物建築位置に、 $10 \times 14m$ のトレンチを設定した。低地を埋め立てた場所である為、盛土は、約3~4m程あった。調査は、この為、段々上に調査範囲を狭めなければならなかった。盛土下の基本層序は、次の通りである。

概略次の4時期に分層される。第1の時期は、中世の土層である。1、2層がこれにあたる。第2の時期は、古墳時代後期から奈良時代にかけて、3~5層が堆積する。第3の時期は、6~9層までの古墳時代中期の土層がある。第4の時期は、10、11層の弥生時代の土層である。

各時期の土層を詳細に説明を加えたい。

中世の土層は、青灰色粘質土である。1層はやや砂土を多く含み、水田かあるいは畑としても利用された土層である。2層は、水田の埋土であろう。出土遺物は、須恵器、土師器、磁器、瓦器等が出土した。それぞれ細片が多く、端部も摩耗するものが多い。この地域は、現代でも方形区画された条里がよく遺存しているが、この土層は、その水田耕作の埋土であろう。調査範囲が狭小の為、南北方向及び東西方向の断面に畦畔等の遺構が検出されなかつた事は残念である。層の厚さは、30.0、28.0cmを測る。

古墳時代後期から奈良時代の土層は、3層（茶褐色砂質土）、5層（灰青色粘質土）である。3層は、割合多くの遺物が出土した土層で、実測した遺物の大半を占める。須恵器、土師器で割合大きな破片が多い。3層除去後、当調査区唯一の溝を検出した。溝-1は、ほぼ東西方向

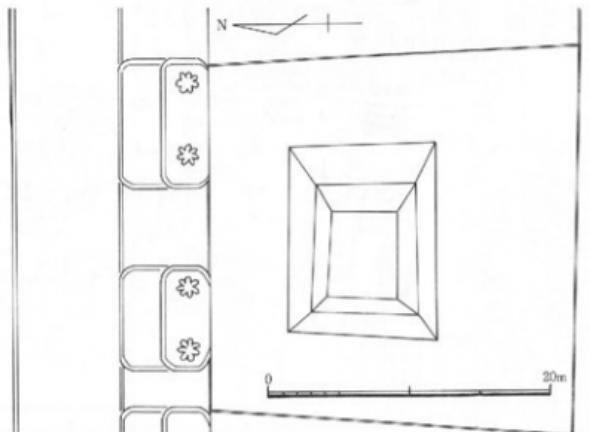


図-2 調査区平板図

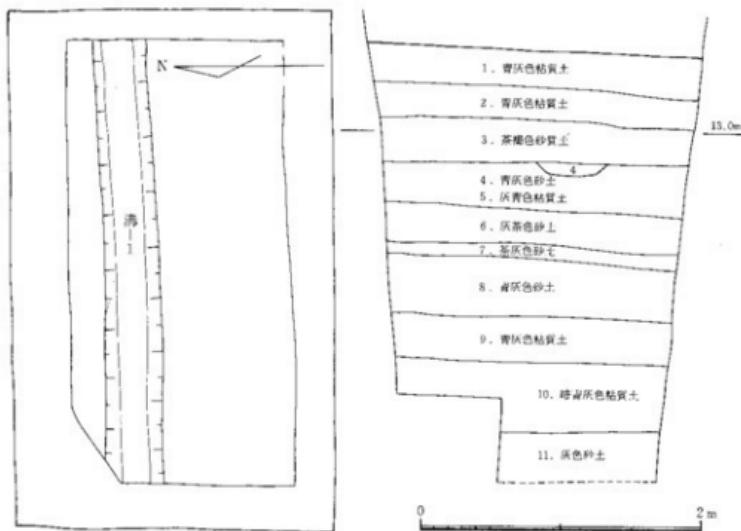


図-3 造構図と西側断面図

に真直ぐ伸びた小溝で、幅40cm、長さ3.2m以上、深さ約10cmを測る。埋土は、青灰色砂土が占め、水の流れがあったものと考えられる。遺物は出土しなかった。どのような性格の造構であるか不明であるが、人為的な溝である可能性が強い。5層は、やや花崗岩の風化したシルト状の土層を多く含んだ埋土である。出土遺物は、須恵器、土師器の細片が出土した。3層の出土遺物と比べ時期的にやや古相であるが、あまり隔たりは感じられない。3層出土遺物の中には、須恵器の杯、壺、甕、土師器の杯、壺、甕、土釜等の日常雑器が多種類出土しており、当時期には、生活した痕跡が認められる。土層の厚さは、3、5層、28.0、35.0cmを測る。

古墳時代中期の土層は、6層（灰茶色砂土）、7層（茶灰色砂土）、8層（青灰色砂土）である。出土遺物は、土師器の細片が少量出土した。この土層は、直ぐ西側を流れる恩智川の氾濫あるいは川筋となっていた場所かもしれない。6～8層の厚さは、26.0、10.0、45.0cmを測る。9層（青灰色粘質土）は、出土遺物がなく、時期は不明である。

弥生時代の土層は、10層（暗青灰色粘質土）である。細粒砂を割合含む。出土遺物は、弥生時代後期に属する土器片が少量出土した。これらの遺物は流れ込んだものではなく、弥生時代の集落が当地域まで拡がっていた事を示す。45.0cmの厚さがある。この下層には、自然木を含む11層（灰色砂土）がある。11層は、50cm以上の厚さがあり、なお下層は不明である。当初から目的としていた縄紋時代の集落の拡がりは、この事から明確にする事が出来なかった。

3. 遺物

遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦、磁器等が出土した。遺物量は、コンテナ整理箱2箱分である。順を追って述べていきたい。

弥生土器

10層から数片の弥生土器が出土した。細片で器種が不明のものが多い。1点長頸壺の破片がある。外面は丁寧なヘラミガキを施こしている。胎土は、角閃石を含む褐色の河内特有のものである。その他の遺物も同様の胎土を呈する。弥生時代第V様式のものであろう。

古墳時代後期から奈良時代の遺物

実測したのはこの時代の遺物のみである。須恵器杯、甕、土師器杯、土釜がある。

1は、土師器杯である。小さな平底から内彎して立ち上がり、外上方にのびて口縁部に到る。口縁端部は巻き込まず端面を丸く終らせる。内面には一条の沈線が巡る。調整は、内外面板ナデにより、内面にさらに放射状の暗紋を施す。色調は、明茶灰色、胎土は精良である。

2は、土師器杯である。小さな平底あるいはゆるやかな丸味を持った底部から内彎して立ち上がり、外上方にのびて口縁部に到る。口縁端部は短く外反し、内傾する端面を持っている。調整は、板ナデによる。内面には荒い粗な暗紋が施されている。色調は、明茶灰色、胎土は精良である。

3は、土師器杯である。丸味を持つ底部から内彎して立ち上がり、口縁端部は内傾する端面に沈線が入る。外面下半はヘラ削りを行なう。内面は、放射状暗紋と螺旋状暗紋が入る。色調は、茶褐色、胎土は微砂粒を少し含む。

4は、土師器杯である。2と同様の形態であるが、口縁端部はやや大きく外反する。内面には放射状暗紋を施す。色調は、茶褐色。胎土は砂粒を多く含む。

5は、土師器杯である。平らな底部から内彎して立ち上がり、端部を丸く終らせる。内面に放射状暗紋を施す、外面下半はヘラ削り調整を行なう。色調は、明茶灰色。胎土は精良。

6は、土師器杯である。平らな底部から内彎して立ち上がり、口縁端部は巻き込むように終る。内面には2段の放射状暗紋を付け、外面上半は、やや密なヘラミガキを施す、下半はヘラ削り調整である。色調は、明茶灰色。胎土は、微砂粒を少し含む。

7は、土師器杯である。平らな底部から外上方へ真直ぐ伸びる。端部は内面に小さな段を持つ。表面は摩耗の為調整は明確でない。色調は、灰茶色。胎土は精良である。

8は、土釜である。口縁は外反して立ちあがり、口縁内面にわずかな段を有する。色調は、茶褐色。胎土は砂粒を多く含む。1～8は、金雲母を多く含んでいる。

9は、須恵器杯蓋である。天井部は、回転ヘラ切りを行なっている。

10は、須恵器甕である。口縁部は、外反後内彎して立ち上がり、端部は尖がる。内面は同心円紋叩きで、外面は平行叩き後にカキ目状のすり消しを行なっている。

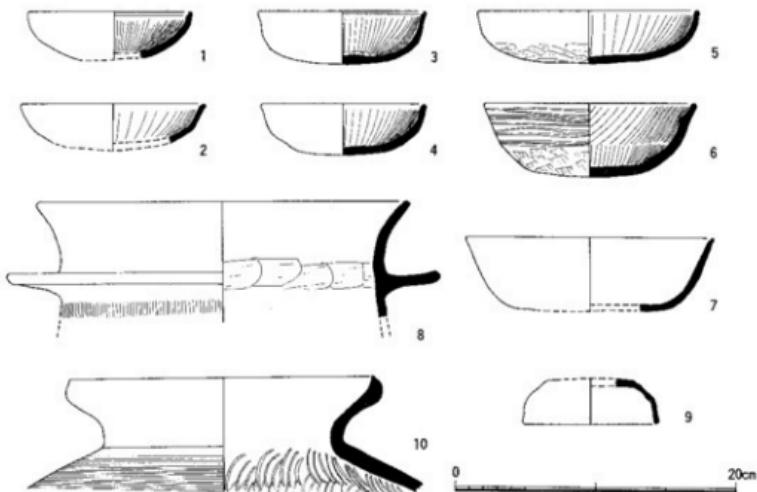


図-4 出土遺物実測図

4.まとめ

大県遺跡は、遺跡深度が深い為、調査自体困難な事が多い。しかし、高尾山高地性集落や多鈕細紋鏡の出土地に近く（徒歩10分位）、その関連性が注目される遺跡である。今回の調査によって得た新知見から遺跡の性格及び環境復元を若干整理したい。

大県郡の条里制の問題であるが、今回の調査によって、鎌倉時代以降の水田は確認されたと考えられる。しかし、奈良時代前後には当地区内は集落址の可能性が強く、条里の痕跡はない。ただ、奈良時代以降の遺構や遺物がなく、検出した溝の方向がほぼ東西方向である事を考慮すれば、同時期に条里制の遺構の有無を否定する事が出来ない。

古墳時代前期から中期にかけては、これまでの調査事例から、当地区から東高野街道にかけての間は、恩智川の氾濫原あるいは、河原となっていた可能性が強い。

弥生時代の遺物が出土した事から、弥生時代の集落範囲がこれまで考えられていた範囲よりも大幅に拡大された。これまでの調査は、遺跡全体からすれば、点と線の調査しか行なっていないが、その範囲は、南北500m、東西500mを測る大集落となる可能性が強い。（北野）

第Ⅱ章 太平寺・安堂遺跡



図-5 調査区位置図

1. 発掘調査の概要

今回の発掘調査は、柏原市水道局による上水道埋設に先立つ緊急事前発掘調査として、柏原市教育委員会が計画・実施したものである。

上水道埋設予定地は、太平寺1丁目144-1～安堂町852で、国道170号線と堅下南小学校を結ぶ東西道路約350m間にわたるものであったが、事前の試掘調査の結果により遺物包含層の検出された予定地内西部分約80mを発掘調査の対象とした。調査期間は1985年3月13日から3月23日まで、調査に関する諸費用は、柏原市水道局の負担によるものである。

当地は、太平寺・安堂遺跡内にある。東・南は生駒山脈の南端である平尾山に、西は旧大和川に囲まれ北に開けた地となっている。標高は調査地点で19m前後で東に行くに従って高くなる。旧大和川をはさんだ対岸には、縄文時代から生活が営まれている船橋遺跡がある。東の平尾山山中には、約1500基の円墳や前方後円墳等で構成される。古墳時代後期の大群集墳が存在し、太平寺地区には、そのうちの約30基が…支群を構成している。7世紀後半から奈良時代には、河内六寺で有名な智識寺や家原寺が同地区内に建立されるが、今回の調査地は、両者の間にあり、天皇行幸の際の宿泊施設である「智識寺南行宮」の推定されている場所である。これまでの発掘調査で、当地区には先に述べた太平寺古墳群^①、6～7世紀代の建物跡、8～9世紀代の古墓等が確認されている。今回の調査では、5世紀後半の掘立柱形^②、8世紀代の溝等の他、遺物包含層内から古墳・奈良時代の遺物とともに弥生時代の土器・石器等も検出した。

調査区は、上水道埋設に伴うため、幅1m、長さ80mのトレーナーを設定し西端から5mごとに区切り各々A区B区……O区とした。調査深度は管が入る深さ1.8m前後までで、それ以下の埋蔵文化財については保存という形をとった。調査方法は、試掘調査の結果から、現地表面下約80cm（アスファルト・パラス）までを重機により掘削し、それ以下を人力にて慎重に掘り下げ遺物・遺構の検出に努めた。

註) ① 大阪府教育委員会「太平寺古墳群」 1980年

柏原市教育委員会「太平寺古墳群」 1983年

② 柏原市教育委員会「太平寺・安堂遺跡」 1984年

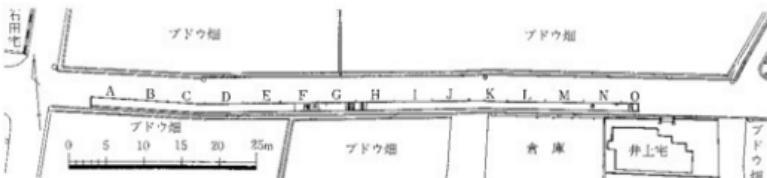


図-6 調査区割付図

2. 発掘調査の成果

今回の発掘調査では、遺構として古墳時代（5世紀後半）の掘立柱掘形2つ・溝1本、奈良時代の溝3本を検出した。また遺物包含層として、弥生・古墳時代の遺物を中心とするもの（遺物包含層Ⅰ）と古墳・奈良・鎌倉・室町時代を中心とするもの（遺物包含層Ⅱ）を検出した。

①. 遺構（図-7）

◎掘立柱掘形1・2 O・P地区で検出したもので、ともに1辺約50cmの隅丸方形を呈するプランを有する。深さは約40cmである。柱痕跡から直径15cm程度の柱が使われていたと考えられる。掘形埋土内には、布留式甕（図-9）や須恵器が混入している。柱間は2.5mで、主軸はほぼ東西を通る。

◎溝1 掘立柱掘形2から東へ1.2mの所に位置し、幅60.0cm、深さ20.0cmで南北方向に伸びると考えられる。埋土は暗灰色砂質土で、土師器・須恵器の他に獸骨（馬の歯）等も含む。

◎溝2・3・4 G・H地区で検出したもので、ともに幅30.0cm、深さ10.0cmで南北方向に伸びる。この3本は幅約2.6mの浅い落ち込み内に掘られている。溝内埋土は、淡灰色砂である。この溝上層茶灰色砂内より8世紀前半の土器（図-10）を検出している。

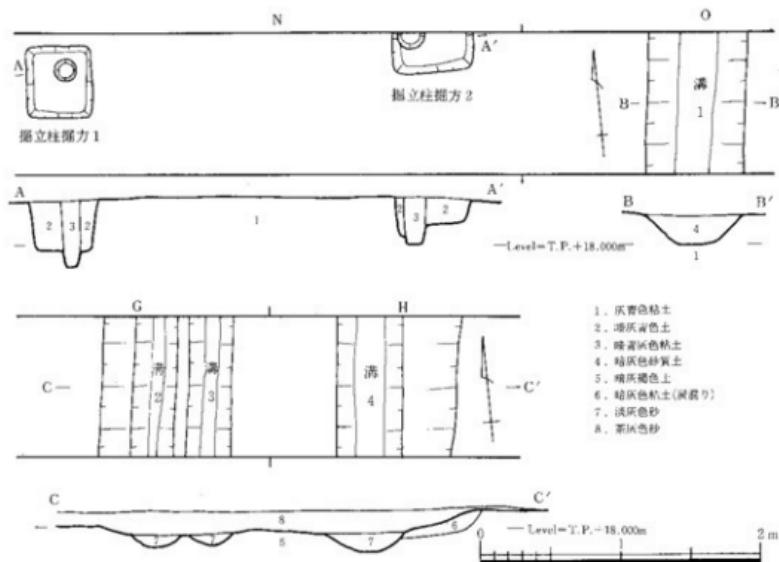


図-7 各遺構平面及び断面図

2. 発掘調査の成果

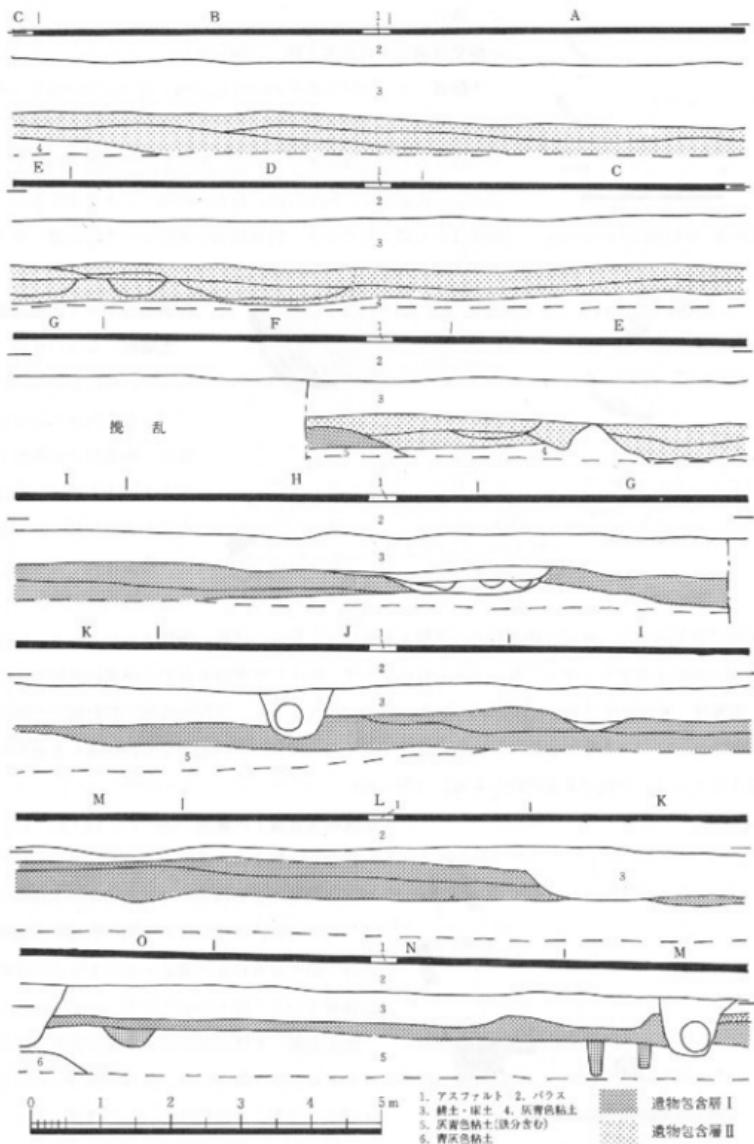


図-8 調査区土層断面図 (南壁・Level-T.P.+18.00m)

②. 遺物

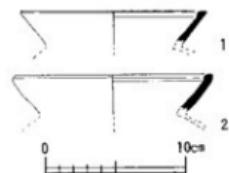


図-9 堀立柱掘形1埋土内土器

◎堀立柱掘形1埋土内土器 (図-9)

土師器 1、2はそれぞれ口径13.0cm、14.0cmで口縁部は直線的に外半し、口縁端部は内側に肥厚し断面三角形を呈する。2のほうがやや丸味をおびている。内外面ナデ調整を施す。色調は、乳灰色で、胎土には、長石・雲母・くさり礫を含む。焼成はともに良好である。口縁端部の形態から布留式甕と考えられる。

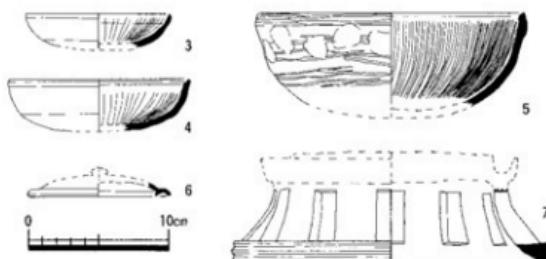


図-10 溝2・3・4上層出土遺物

◎溝2・3・4上層遺物

土師器 3は口径10.2cm、4は口径13.0cmの杯で、ともに内面に放射状暗紋、外面に横方向のヘラ磨きを施す。4の口縁端部は内傾する面に軽い段を有し、端部は丸くおさめる。5は口径18.8cmの鉢で、内面に放射状暗紋、外面に横方向のヘラ磨きを施す。胎部には軽い指押えも見られる。口縁端部は内傾する面を有する。3～5とともに乳茶色で、胎土には雲母を含む。焼成は良好である。

須恵器 6は口径10.0cmの杯蓋で内面にかえりを有する。7は、陶硯の脚部で脚台部に2条の凹線を施す。スカシは長方形で、12方に復元できる。この他に、内面かえりの消失した蓋等も検出している。時期は8世紀代である。(図-10)

◎遺物包含層I内遺物 (図-11・12・13・14)

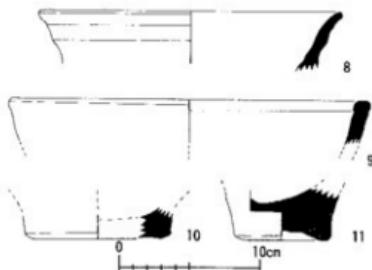


図-11 遺物包含層I出土弥生土器

遺物包含層I は、F区からO区に見られるもので、暗茶褐色砂質土・暗茶褐色土を主体とする。遺物には、弥生時代の土器・石器、古墳時代の土器が見られる。溝2・3・4はこの遺物包含層を切って構築されている。

弥生土器 8は口径21.0cmで壺か甕の口縁部と考えられる。胎土には、長石・雲母・角閃石・石英を含む。9は口径25.8cmの浅鉢である。胎土には長石・雲母・角閃石を含み、色調は茶褐色を呈する。10・11は甕か壺の底部である。

石器 打製石槍（図-12）は、サヌカイト製で、現存長7.1cm、最大幅4.2cm、最大厚1.9cmである。両面ともに加工が及んでいるが、細部調整が見られないことや、両端部が欠損していること等から、製作途中で欠損したため廃棄されたものと考えられる。この他に剝片に細部加工を施し刃をつけたものや、石核、剝片等が多数出土している。

時期は、土器の特徴や石器を伴うことから考えて、弥生時代畿内第Ⅳ様式期であろう。

土師器 13~15は杯身、16は皿、17・18は鉢、19~23は甌、24・25は羽釜、26は甌、27・28は小形高杯、29はすり鉢である。13は口径10.0cmで口縁端部は内傾する面を持つ。

内面ナデ調整、外面指捺えを施す。14は口径13.0cmで口縁部は外方にわずかに屈曲し端部は丸くおさめる。内面放射状暗紋、外面ナデ調整を施す。15は口径16.6cmで口縁端部は内側に軽く巻き込む。内面には斜放射状+放射状暗紋、外面にはヘラ磨きを施す。16は口径21.8cmで口縁端部は面をなす。内面には放射状暗紋、外面口縁部にヘラ磨き、底部にヘラ削り後ナデを施す。17は口径19.0cmで口縁部は外方にわずかに屈曲し端部は丸くおさめる。内面には放射状暗紋、外面には横方向のヘラ磨きを施す。18は口径27.0cmで口縁部外面に強いナデが施され、口縁端部には1条の沈線を施す。内面斜方射状+螺旋状+放射状暗紋、外面胴部に指捺えを施す。19は口径23.4cmで口縁端部は水平な面をなす。最大径は口縁端部にある。内面ヘラ削り、外面指捺えを施す。20・22は口径それぞれ16.6cm、13.0cmで口縁端部に水平な面を有する、ともに胎部に最大径を持つ。21は口径21.0cmで口縁部は外方に強く屈曲する。口縁端部は面をなす。内外面にハケ目調整を施す。23は口径12.4cmで口縁部はわずかに外彎する。口縁端部は上方にわずかにつまみあげる。内外面ナデ調整。24・25はそれぞれ口径24.8cm、25.0cmで口縁部は外反気味に広がる。鉢は4.0cmの幅で貼り付けである。24の胴部は直線的であるのに対し25の方はわずかにふくらむ。口縁部は内外面ナデ、胴部は内面指捺え、外面ハケ目調整を施す。26は甌の眉庇部分で口縁端部外傾面に同心円紋叩きを施している。24~26の胎土には、雲母、長石等を多量に含む。27・28はともに手捏で、杯部を欠く。27の脚端部は水平な面を有する。29は口径16.0cmで口縁端部には水平な面を有する。須恵器のすり鉢を模倣したものであろう。

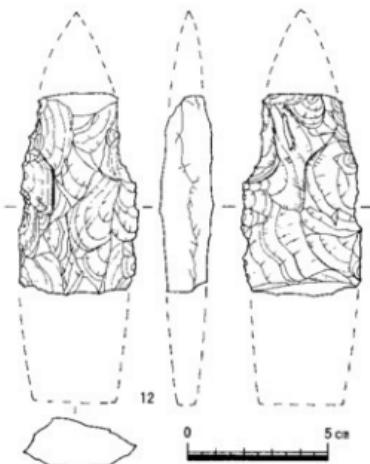


図-12 遺物包含層Ⅰ出土打製石槍

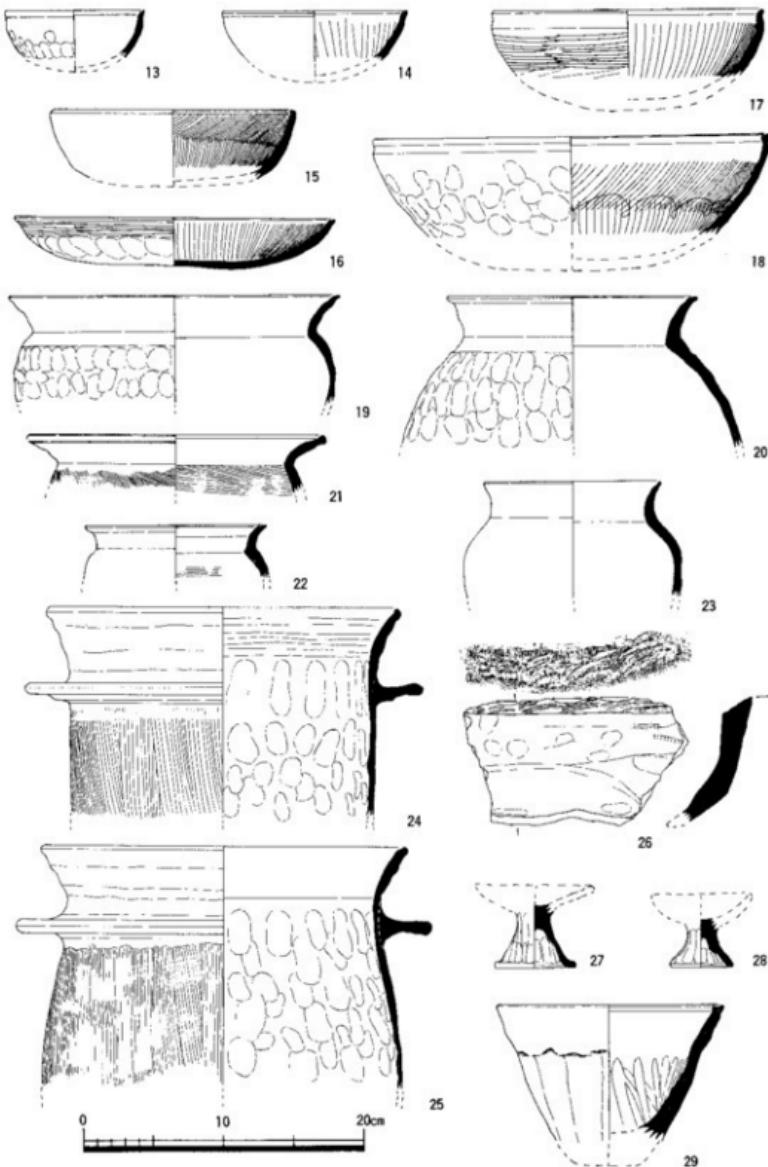


図-13 遺物包含層I出土土師器

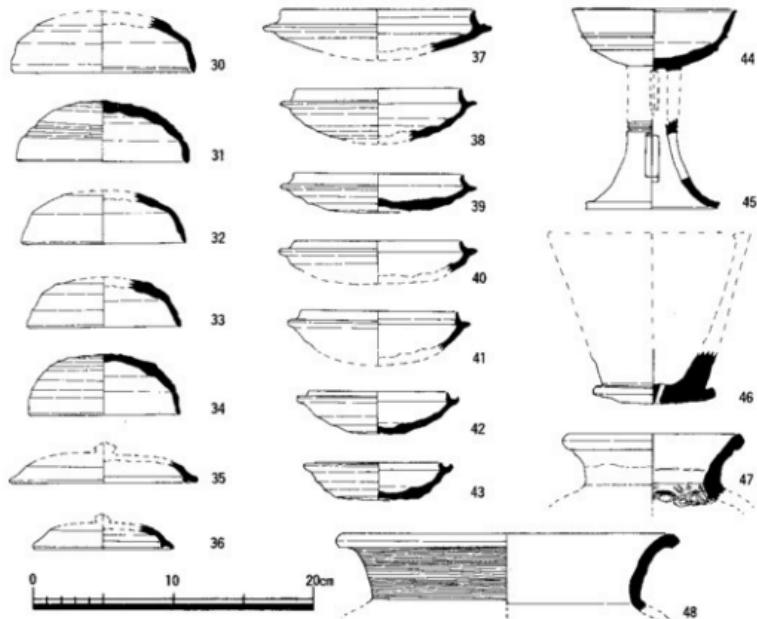


図-14 遺物包含層I出土須恵器

須恵器 30～36は杯蓋、37～43は杯身、44・45は高杯、46はすり鉢、47・48は甕。30は口径12.8cmで口縁端部内傾面に段を有する。31～33は口径12.0cm～10.8cmで、31は体部と天井部との境に凹線を2条施す。ともに口縁端部は丸くおさめる。34は口径10.4cm、器高4.3cmで、30～33より小形で背が高い。35・36は口径13.0cm、10.0cmで内面にかえりを持つものである。37は受部径16.2cmで立ちあがりも高く、他のものより大きい。38～41は受部径14.0cm前後で底部約3分にヘラ削りを施す。42・43は受部径10.5cmで立ちあがりが低く43では受部と同じ高さにまでなっている。44は口径11.6cmで体部に2条の断面三角形の凸帯を有する。口縁端部は丸くおさめる。45は脚部径9.2cmで脚端部は四角形を呈する。44・45から長脚2段2方スカシの高杯を復元しうる。46は底部径8.7cmで、底部中央に径0.3cmの孔を1つ開けている。内面は摩滅が激しい。47は口径12.0cmで口縁部は外彎し端部は外方にふくらみを持つ。内面同心円紋叩き、外面平行叩きを有する。48は口径23.6cmで、口縁部は外彎し端部は外方に屈曲する。

土師器・須恵器の時期は、6世紀末から7世紀末にかけてのものである。また器種としては、杯・皿・高杯・鉢・甕・羽釜・竈等の日常生活用品の他に、小形高杯等の祭祀遺物も見られる。特に、口縁部に同心円紋叩きを有する竈の存在は、注意を用する。

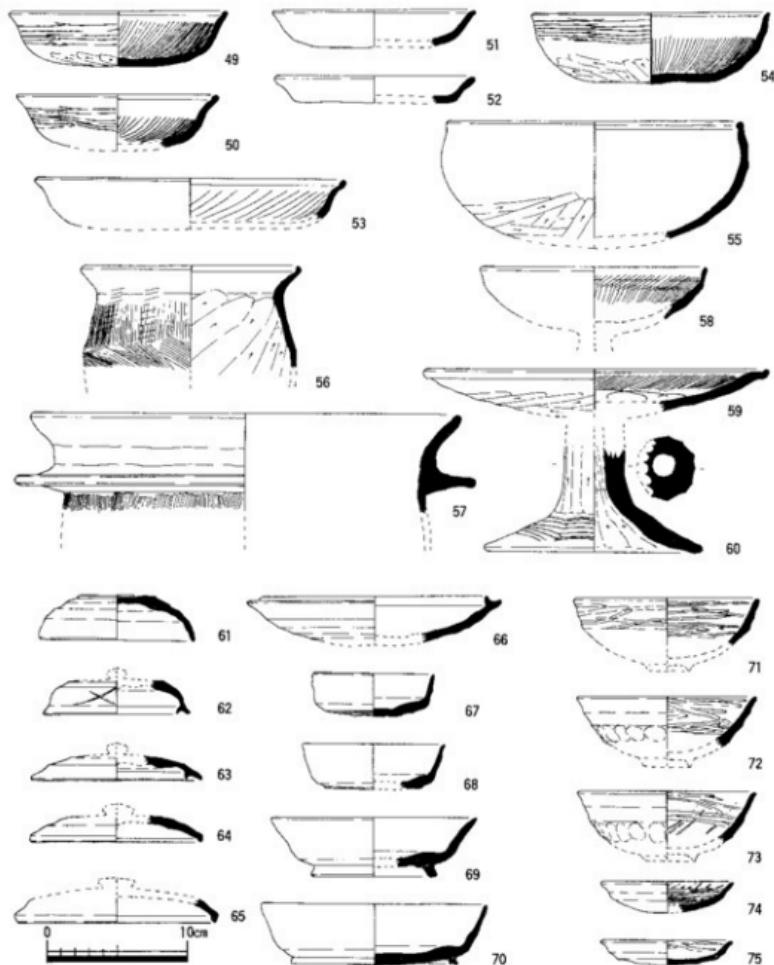


図-15 遺物包含層Ⅱ出土土師器・須恵器・瓦器

◎遺物包含層Ⅱ内遺物 (図-15・16)

遺物包含層Ⅱは、A区からF区に見られるもので、暗褐色砂質土を主体とする。遺物には、古墳時代から奈良時代にかけての土器、中世の瓦器、下駄等が見られる。

土師器 49・50は杯身、51～53は皿、54・55は鉢、56は甕、57は羽釜、58～60は高杯である。49・50は口径15.0cm、14.0cmでともに口縁部は外彎し端部は内側に軽く巻き込む。内面は斜放

射状暗紋、外面には、横方向のヘラ磨きを施す。49の底部にはヘラ削りが施されている。51・52は口径14.0cmでともに内外面ともナデ調整を施す。53は口径21.4cmで口縁部は外方に屈曲し端部は内側に軽く巻き込む。内面には粗い斜放射状暗紋を施す。54は口径16.6cm、器高5.0cmで口縁部は内聴気味に立ちあがり端部には内傾する面を有する。内面放射状暗紋、外面横方向のヘラ磨き、底部ヘラ削りを施す。55は口径21.0cmで口縁部は内聴し端部は内側に肥厚する。内外面胴部はナデ、外面底部にはヘラ削りを施す。56は口径15.0cmで、口縁部は外反し端部は上方へ短かく立ちあがる。内面ヘラ削り、外面ハケ目調整を施す。57は口径30.0cm、鉢幅4.0cmで口縁部は外聴する。口縁部・鉢はナデ、胴部内面指押え、外面ハケ目調整を施す。胎土には、雲母・長石等を含む。58は口径16.0cmで口縁部は直立し端部は丸くおさめる。内面には斜放射状+放射状暗紋、外面にはナデ調整を施す。59は口径24.8cmで杯部は扁平に広がり口縁端部は内側に軽く巻き込む。内面斜放射状+螺旋状暗紋、外面底部にヘラ削りを施す。60は脚端部径15.0cmで脚柱部には12面の面取りを施す。脚裾部外面にヘラ磨きを施す。

須恵器 61～65は杯蓋、66～70は杯身である。61は口径11.0cmで天井部はヘラ切り未調整である。62～63は内面にかえりを持つもので62は天井部が高く、「メ」印のヘラ記号を有する。64・65は内面かえりが消失したもので口縁端部は下方に短かく屈曲し、天井部は丸味を持つ。66は受部径18.0cmで短い立ちあがりがつく。67・68は口縁部が底部より直立気味に立ちあがるもので端部は丸い。69・70は貼り付け高台を有するもので、69は外方に開くしっかりとした高台を持ち口縁部は外聴気味にたちあがる。70は口縁部が内聴気味に立ちあがり、低い高台を有する。

土師器・須恵器の時期は、7世紀

紀後半から8世紀中頃にかけての
ものである。

瓦器 71～73は碗、74・75は皿。
71は内外面に暗紋、72・73は内面
のみに暗紋を施す。口径はとも
に12.5cm前後である。74・75の内
面には暗紋を施す。時期は12～
13世紀のものである。

木製品 下駄（図-16）は全長
11.0cm、幅6.0cmと小形のもので、
鼻緒の孔が3カ所に開けられてい
る。歯は削り出しによるものでか
なり磨り減っている。小供用のも
のであろう。

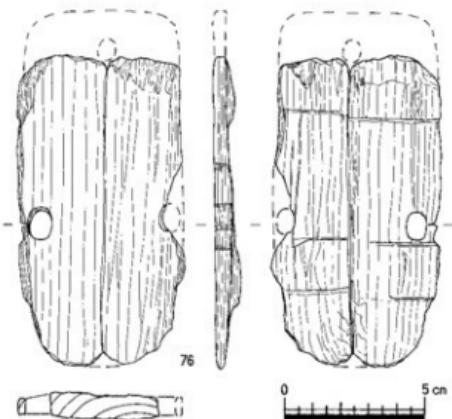


図-16 遺物包含層Ⅱ出土下駄

3.まとめ

今回の調査は、水道管埋設に伴うものであるためかなりの制限を受けたが、今回の結果及びこれまでの調査結果から、太平寺・安堂遺跡の歴史的位置付けを考える。

当地で生活が営み出されたのは、旧石器時代に遡ることが確認されている。縄文時代の遺構遺物は今のところ不明であるが、弥生時代には、北の大県南遺跡・西の船橋遺跡等とともに存在している。古墳時代中頃には、掘立柱を有する建物が存在していたことが確実となったが、その時代に伴う遺物は、包含層内からは全く検出されなかった。これとは逆に古墳時代後期の遺物は包含層内より多量に検出したが、その時期の遺構は検出されなかった。しかし遺物の器種構成等から考えるとこの時期にも何らかの生活が営まれていたことは確実である。7世紀後

半になると智識寺・家原寺等の建立が始まる。

今回の調査地はちょうど両寺の間にあり「智識寺南行宮」の推定地であったが、これを裏付ける資料は検出できなかった。しかし、奈良時代の遺物も多数検出することができた。平安時代の遺物は今回検出し難かったが、鎌倉・室町時代にかけての瓦器碗を検出した。当遺跡では他の地点でもこの時期の遺物が検出されている。

最後に今回出土した同心円紋叩きを有する甕と類似するものとして鳥坂寺跡出土の甕（図-17）を紹介しておく。当資料は、7世紀後半の大規模な整地層内に混入していたものである。原体の差はあるがともに口縁端部外傾面に同心円紋叩きを施しており、胎土には雲母・長石等を含む。この時代の遺物として同心円紋叩きが見られるものは須恵器甕内面、あるいは須恵質博等に限られ、土師器にこのような紋様が施されることは極めて稀なことである。5世紀中頃須恵器工人と共に日本に持たらされた甕を含む炊飯具に繩蔦紋や格子目紋の叩きが施されるところから考えると、時期差があるにせよ今回の資料は、須恵器工人との関連を窺い知るものであり、甕が織り成す炊飯祭祀世界を解明する有力な手がかりとなるものである。（田中）

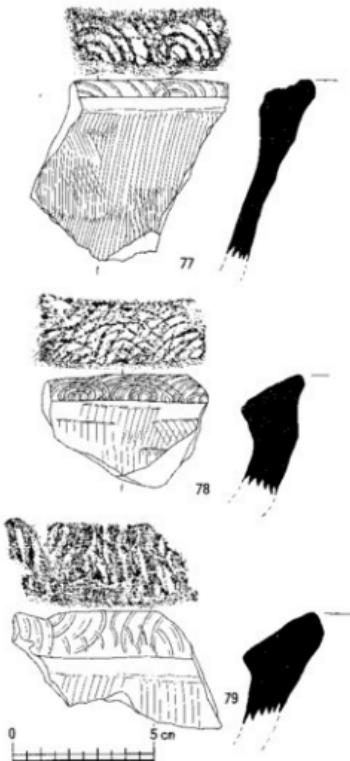


図-17 鳥坂寺跡出土甕片

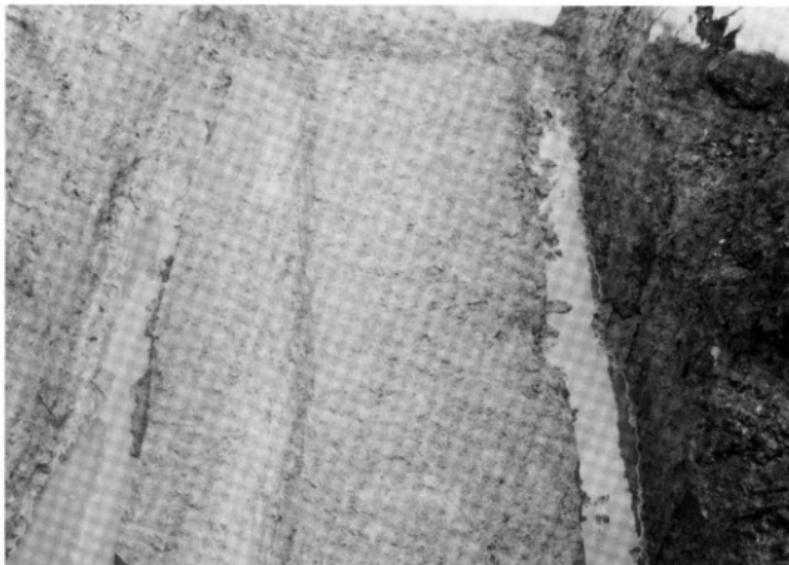
図 版



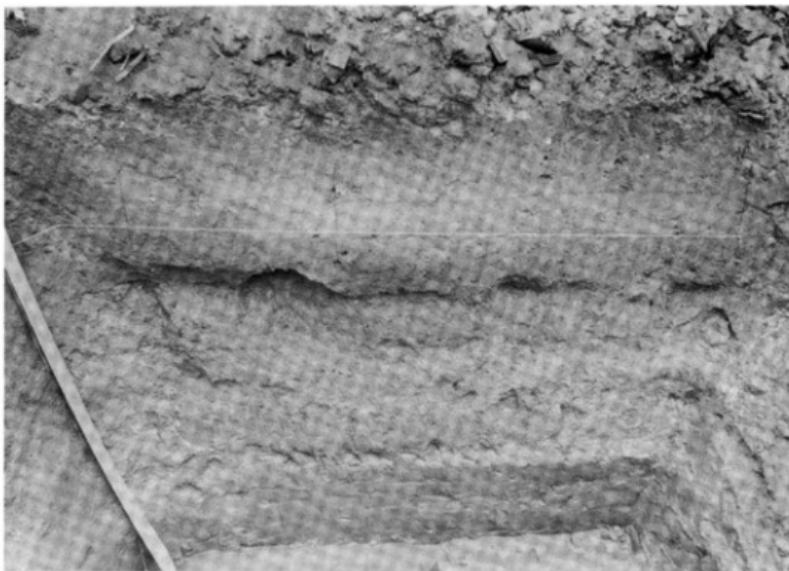
1. 中層遺構面



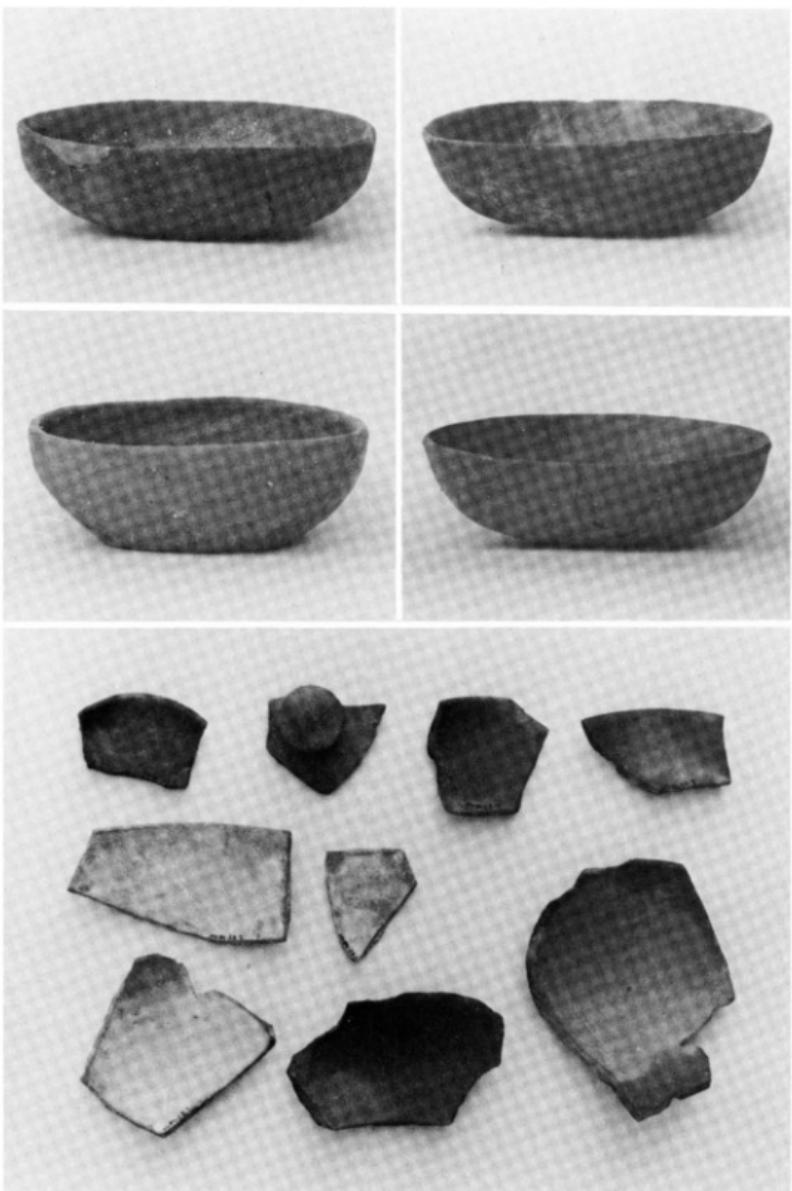
2. 作業風景



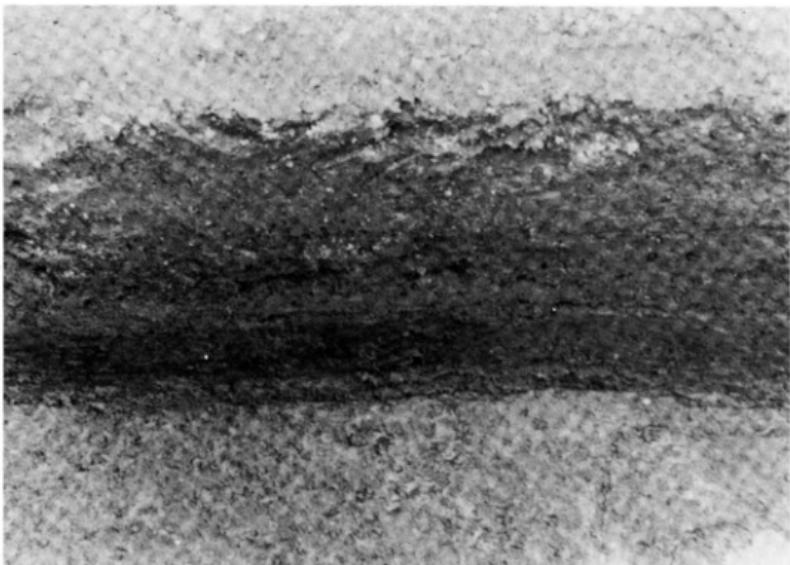
1. 遺構検出状況



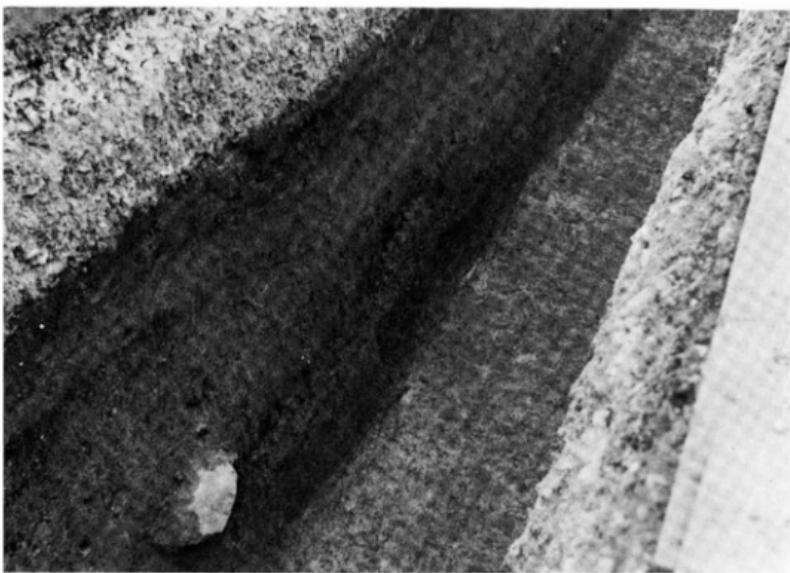
2. 北側断面



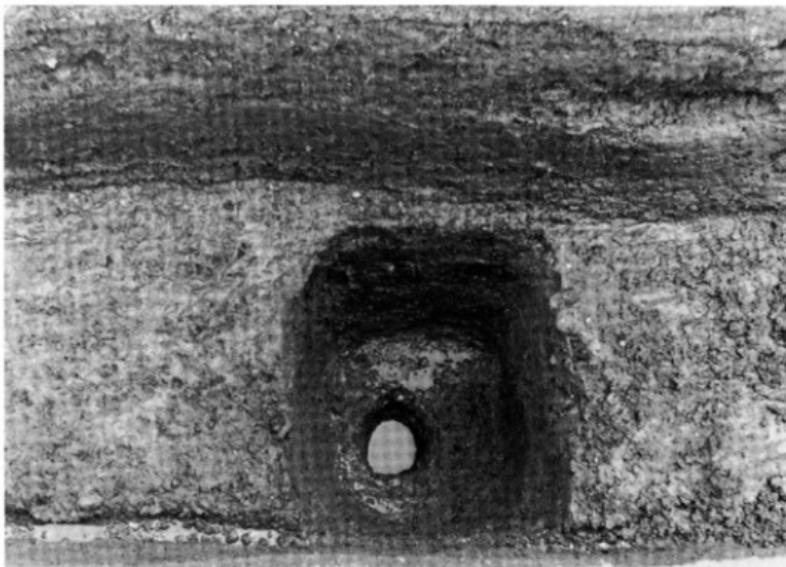
出土遺物



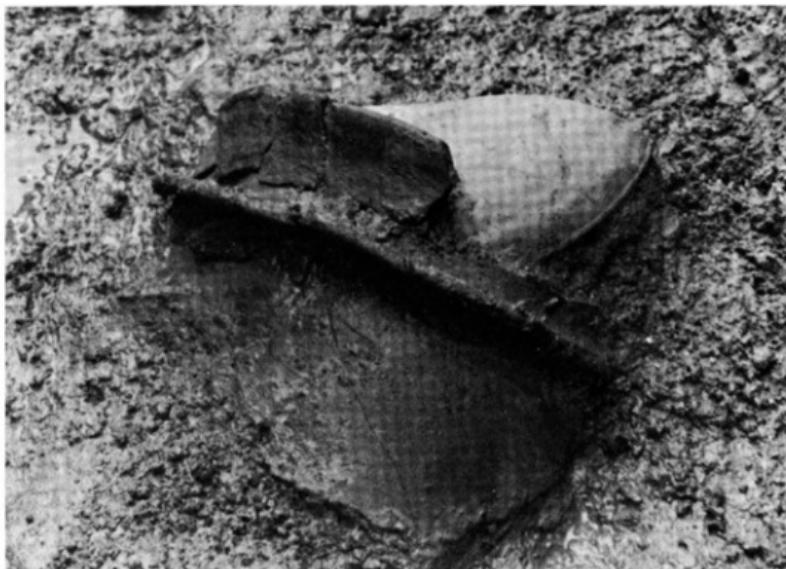
1. N地区 土層断面（北より）



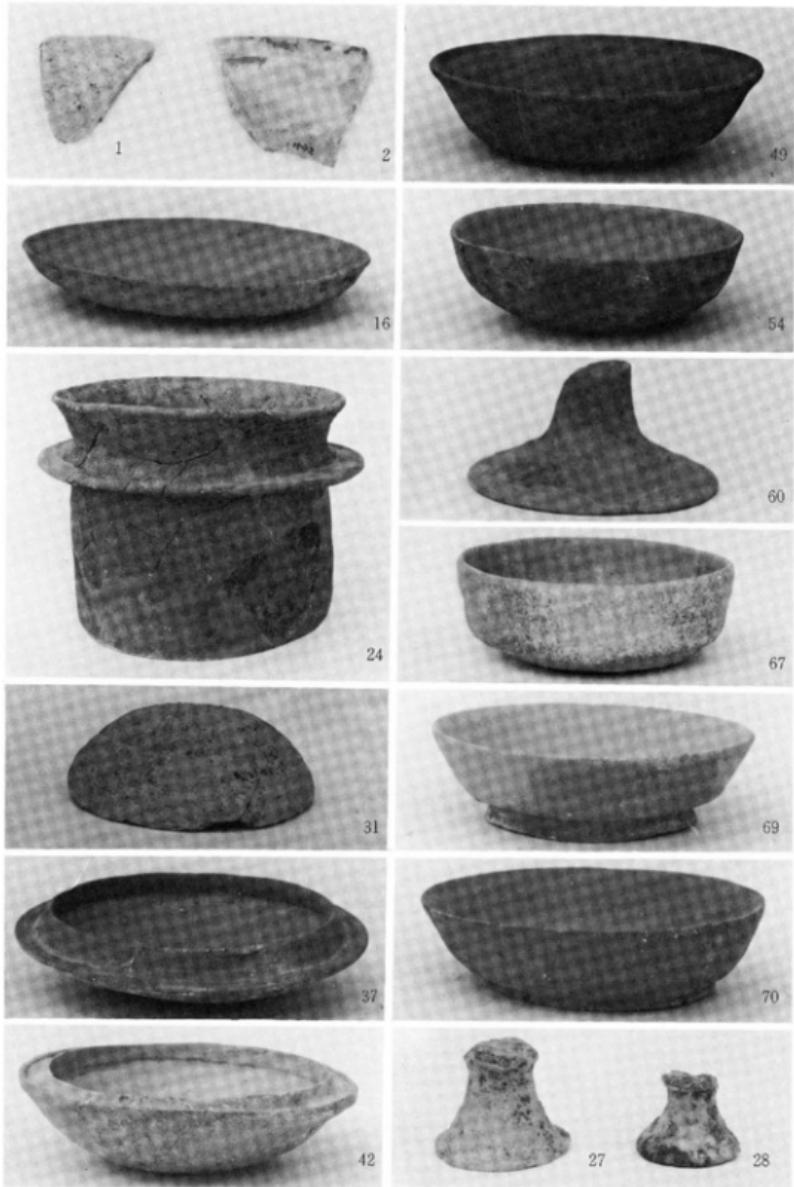
2. H地区 土層断面（南東より）



1. 挖立柱掘方 1 (北より)



2. 遺物出土状況 (16・25)



出土遺物（番号は図と同じ）



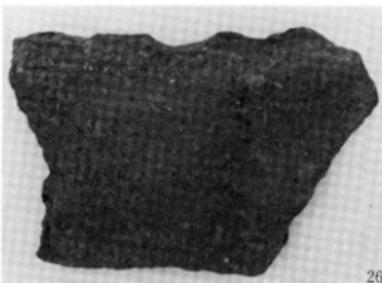
12

打製石槍



76

下駄



26



77



78



79

龜

柏原市所在遺跡発掘調査概報

——大県遺跡、太平寺・安堂遺跡——

1984年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内717

発行年月日 昭和60年7月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

